

Robert M. Townsend, Sombat
Sakunthasathien and Rob Jordan,

*Chronicles from the Field:
The Townsend Thai
Project*

Cambridge, MA: The MIT Press,
2013. xxi + 135pp.

つかだかずなり
塚田和也

I

人文科学や社会科学の他の分野と同様、経済学でもフィールド調査は研究活動の重要な基礎をなす。調査地での観察、対話、参加を通じて得られる知見は、問題の発見と対象の理解をもたらす最初のステップとなる。また、長期にわたり詳細かつ正確なデータを収集できれば、理論の妥当性や特定の因果関係を実証的に検証することも可能となる。市場の不完全性や政策の影響に関する厳密な分析への要請が高まるにつれ、近年ますます多くの研究者がフィールド調査を実施し、独自の質問票によるマイクロデータの収集を試みるようになってきた。経済学における無作為化比較試験（いわゆるフィールド実験）の有用性が広く認識されたことも、この傾向に拍車をかけている [Banerjee and Duflo 2011]。こうして収集されたマイクロデータにもとづく優れた研究成果が数多く発表される反面、フィールド調査の実施段階に関わる経験の多くは研究者個人と研究チーム内部に蓄積され、これまで一般に共有される機会が乏しかったといえる。フィールド調査それ自体の知的ストックにアクセスすることは、決して容易なことではなかったのである。

本書は、タイで15年以上にわたり家計データを収集してきた研究プロジェクトの記録である。タウンゼント・タイ・プロジェクト (Townsend Thai Project) として知られるこの取り組みは、現在も継

続中であり、発展途上国の家計を対象としたものよりも細かつ長期におよぶデータを提供するものひとつとなっている。収集されたデータには、家族構成や健康状態、資産などの基礎的な情報に加えて、支出、貯蓄、借入といった家計の消費面に关わるもの、さらには農業と非農業における労働投入、経常投入、所得、投資など家計の生産面に关わるものが含まれる。また、村内でのグループ活動や人的ネットワーク、農地土壤に関する情報なども適宜収集されている。プロジェクトはタイ中部と東北部の農村家計2,880戸を対象とした1997年のベースライン調査を起点とし、そのうち960戸については1998年以降も継続して年次データが収集されている。また、1999年からは中部と東北部の別家計680戸について月次データが収集され、2003年と2004年には南部と北部の農村家計260戸が、さらに2005年には都市家計1,440戸が新たに年次データの収集対象に追加された。本書の目的は、こうしたマイクロデータ収集における野心的なプロジェクトがいかなる経緯と努力のもとで実現したのかを紹介し、そこでの出来事や教訓を広範な読者と共有することである。

プロジェクトの学術的な成果については、その一部がTownsend [2011] にまとめられている。本書はこれと異なりフィールド調査それ自体に焦点をあてたものである。とはいえフィールド調査のやり方を具体的に指南したマニュアルの類というわけではない。本書を通読したとしても、円滑なフィールド調査を直ちに実施できるようになることは、おそらく期待できない。むしろ、本書はマイクロデータを収集するという行為が必然的に人々の間に摩擦を生じさせるものであることに目を向け、そうした摩擦が存在するなかで相互理解を深めながらプロジェクトを発展させてきた過程を、タイの社会的文脈において描いたものである。そのため、調査員と村人との信頼関係の構築、調査員同士のコミュニケーションと対立の解消、大規模かつ継続的なマイクロデータ収集のための組織運営など、フィールド調査の実施段階における人的側面に多くの記述を割いていることが特徴的である。これらの論点は、フィールド調査に関わったことがあるものならば、誰しも一度は頭を悩ませることであろう。

本書は3名の共著となっている。このうちRobert

M. Townsend教授は、プロジェクトを統括する責任者である。経済学の理論研究で優れた業績を残しつつ、近年はプロジェクトの提供するマイクロデータを用いて、家計が直面するリスクや金融制約について構造モデルを用いた実証研究の成果を発表している。Sombat Sakunthasathien氏は、プロジェクトを現地で遂行してきた人物であり、本書の隠れた主人公である。本書の内容は同氏が現地で経験した出来事への回顧に多くをもとづいている。最後に、本文を実際に執筆しているのはRob Jordan氏である。ジャーナリストでもある同氏の平易な文体と物語性を帯びた語り口により、本書は専門家のみならずフィールド調査やタイ社会そのものに関心を有する一般の読者にとっても、手に取りやすいものとなっている。

II

本書の具体的な内容に話題を移そう。本書は序論に続く8つの章とエピローグ、そして補論から構成される。各章はプロジェクトの開始から本書が刊行される時点までの出来事を時系列に沿って配置したものとなっており、各章が独立した異なるトピックを扱うわけではない。また、8つの章と補論を含めても全体で125ページと分量が少ないため、各章を個別に紹介することは避け、全体の流れを意識しながら簡潔に内容を整理したい。

プロジェクトをめぐる物語は、タイ北部山間地域でタイ農業・農業協同組合銀行(Bank for Agriculture and Agricultural Cooperatives of Thailand)の職員として融資プログラムの設計と普及にあたっていたSakunthasathien氏のもとを1人の経済学者が訪問するところから始まる。この経済学者こそTownsend教授である。2人は初対面であったが、農村の経済状況をめぐりさまざまな意見交換を行った。特に、政府によるトップダウン型の開発政策が、しばしば農村家計に関する正確な情報を欠いたものであるため、善意にもとづくものであっても期待通りの効果をもたらさず、ときには予想外の負の効果をもたらしてしまう可能性について懸念を共有した。そして、こうした問題を避けるためには、農村家計に対するに関するしっかりとした情報が必要であることについても意見の一致を見たのである。

この2人が再会を果たすのは2年後の1995年である。事情によりタイ農業・農業協同組合銀行を離れていたSakunthasathien氏は、それ以降プロジェクトと歩みを共にすることとなる。

マイクロデータ収集の調査資金を得るため奔走していたTownsend教授は、同時に現地で調査チームを指揮する人物を必要としており、研究の重要性について考えを同じくするSakunthasathien氏の協力を仰いでフィールド調査の準備を進めることとした。セミマクロの二次データを分析して調査地を選定し、質問票の準備を整えてベースライン調査が開始されたのは1997年3月のことである。総勢で200人以上となる調査員には首都バンコクの大学生がリクルートされ、そのほとんどは20代前半の若者であった。

ベースライン調査で直面した課題の多くは相互理解に関するものである。まず、すべての関係者の間で調査の目的に関する共通理解を形成する必要があった。Sakunthasathien氏による事前の周知や行政との協力関係構築にもかかわらず、農村家計には少なからず調査に不信感を抱くものが存在した。農村家計との対話で重要となったのは、収集されたマイクロデータの秘匿性であり、とりわけ、情報が政府による税金徴収に利用されないという保証であった。一方、調査に協力した結果、政府からの補助金や開発プロジェクトが実現することを期待する農村家計も存在した。こうした誤った期待を排除するため、農村家計には学術的な貢献と長期的な政策改善に資するという以外に、直接的な便益は存在しないことを納得してもらおうという困難だが重要な作業も必要となった。要するに、フィールド調査は対象となる農村家計の協力と理解なしには実現しなかったのである。

調査内容とやり方に関する相互理解も課題となった。調査員には質問票に関する入念なトレーニングが実施されたものの、地域によりまちまちな農事暦や度量単位、方言による固有の言い回しに対応して質問や回答コードを調整する必要が生じた。また、農村家計は、質問が回答者個人に向けられているのか家計全体に向けられているのか、所得に何を含まるかといった点で混乱をしてしまうことがある。調査員と農村家計の相互理解が不十分な初期には聞き取りの時間が非常に長くなり、農村家計をイライラ

させ態度を硬化させてしまうこともあった。そうした場合、調査を途中で切り上げたり、別の話題をして緊張を和らげたりする術が調査員にも求められる。そうしたノウハウを調査員と共有することも、長らく農村で仕事をしてきたSakunthasathien氏の役割であった。

最後に、調査員同士、あるいは調査員と監督者との相互理解がチームワークを促進するうえで重要な要素となる。ベースライン調査では慣れない農村生活によるストレスの増大に加えて、労働時間や給与支払い、質問票のチェックなどをめぐって調査員と監督者との対立が生じ、一部の調査員がチームから離脱しそうになる危機も迎えた。そうした問題に対しては、十分な休息を取り時間をおいて双方が改めて対話を行うとともに、フィールド調査の意義を全員で再確認するという措置が取られた。こうした努力を通じて、1997年のベースライン調査は、2カ月をかけて無事に完了することとなる。関係者の相互理解を促すひとつひとつの試みは些細なものであるが、こうした努力の積み重ねがなければ、フィールド調査の質が格段に低下したことは想像に難くない。フィールド調査においては、調査員も農村家計も会話や意思疎通を通じて何らかの楽しみを見出すことが重要であり、特にタイの農村社会文脈ではそうした雰囲気や醸成することが調査の成功をもたらす秘訣であることも示されている。

当初、タイにおけるフィールド調査はクロスセクションデータの収集という1回だけで終了する予定であった。しかし、ベースライン調査が終わって間もなく生じた金融危機がこの方針を百八十度変えることになる。タイに端を発した金融危機は瞬間にアジア全域へと波及し、経済に深刻な影響をもたらした。当然ながら、農村家計も金融危機の影響から無縁ではない。金融危機の影響を通じて、タイの農村経済と金融システムをさらに詳しく分析する必要性を認めたTownsend教授は、直ちに新たな調査資金を求めて奔走し、Sakunthasathien氏とともに同じ調査地で再調査を行うことを決断した。

再調査では対象となる農村家計の数を減らし、質問票の内容もより焦点を絞ったものにすることで農村家計や調査チームの負担を軽減することとした。また、このことを通じて長期的に持続可能なプロジェクトとしての基盤を整えた。その一方で、同じ

地域の別家計に月次調査を実施する準備も進め、プロジェクトのカバーする対象を拡大することにしたのである。マイクロデータの継続的な収集を行うため、プロジェクトは首都バンコク以外の調査地にも現地オフィスを構え調査員や監督者を配置した。ベースライン調査に参加した調査員の多くは、すでに就職してプロジェクトの参加が期待できないため、おもな調査員を現地でリクルートすることとなった。これは、調査地の慣習や経済状況に精通した人物を確保するためにも必要であったといえる。

同一の農村家計に継続的な調査を実施することのメリットは、時間を通じて相互理解がますます深まることである。調査員はデータ収集のため定期的に農村家計を訪問するだけでなく、村のイベントや冠婚葬祭にも顔をだすことで、農村家計との信頼関係をより強固なものとするのが奨励された。その反面、あまりにも親密な関係となってデータの質に問題が生じることはないよう、調査の際には農村家計と一緒にアルコール類を飲むことを禁じるなど、さまざまな規律も導入した。これらを背景として、プロジェクトの農村家計が意図的に調査からドロップアウトする率は低く抑えられている。一方、フィールド調査の継続的な実施において困難な点は調査員の生活を安定させることである。プロジェクトの資金から捻出できる調査員の給与は少なく、また毎日決まった仕事が存在するわけではない。そのため、調査員はプロジェクト以外の仕事に従事することが認められ、労働時間や調査スケジュールを柔軟に調整することとなった。さらに、調査員のなかで自発的に基金を設立して必要な場合には低利で融資を実施する仕組みなども整えられた。プロジェクトが長期におよぶにつれその実績は広く知られるところとなり、さまざまな機関との協力を通じて調査対象をさらに拡大する機会が訪れた。タイ農業・農業協同組合銀行はマイクロデータの有用性を高く評価し、南部と北部においても同様の調査を実施するための資金提供を行った。ただし、南部では治安の悪化によってプロジェクトの一部撤退が余儀なくされ、北部でも資金的な問題からプロジェクトの縮小が迫られた。プロジェクトの成果として発表された論文のなかには、政府の政策を批判したと受け止められるものも存在したが、当時のタクシン首相や政府関係者との対話を通じて政策評価の重要性が認められ、

政府の要請にもとづき都市家計への調査も開始された。また、学術的交流を目的としたタイ商工会議所大学との協力関係は、月次データ収集への資金提供だけでなく、各種統計データの整備という形でプロジェクトに貢献することとなる。こうして、プロジェクトは地理的な範囲を拡大し、都市の家計を含む大規模なものへと変貌を遂げた。データクリーニングや組織運営の効率性を追求する努力はますます重要となるが、フィールド調査それ自体への姿勢はベースライン調査の時点からそれほど変化していない。そこでは、関係者との信頼構築が一貫して重視されているのである。

III

本書はすでに明らかなように、フィールド調査を実施してきたひとつの研究プロジェクトに関する記録であり、その学術的な成果を収めたものではない。そのため、本書を純粋に学術的な観点から評価することは困難であり、また適切でもない。本書の魅力は、家計のマイクロデータ収集において長年の実績を上げてきたタウンゼント・タイ・プロジェクトの歴史を追体験できることであり、成功や失敗のエピソードに対する共感を通じて、自らのフィールド調査の在り方を見直すきっかけが得られることである。とはいえ、短い記述のなかでフィールド調査のすべてが語りつくされているわけではないため、若干の物足りなさを感じることも確かである。それらが決して本書の価値を減じるものでないことを断つたうえで、以下では2点ほど指摘しておきたい。

第1は、フィールド調査の設計段階に関する記述が少ないことである。たとえば、調査地から移動した家計を追跡して調査すべきかどうかは、パネルデータを構築するうえで重要な論点となる。プロジェクトではあらかじめ作成した家計の予備リストから、新たに置き換える方法をとっているが、そうした方法がもたらす影響については慎重に考慮がなされるべきである。また、家計に過去の情報をさかのぼって質問することの是非も議論されなければならない。プロジェクトのベースライン調査では過去の資産状況などをさかのぼって質問しているが、データの正確さに対する評価基準が必要となる。さらに、フィールド調査においてはデータの入力とク

リーニングが決定的に重要な作業となるが、現在はタブレット端末を用いてその場でデータ入力とチェックを行うことも、かなり一般的な手法となっている。プロジェクトではいまだ導入されていないが、そうした手法の費用と便益を現地の状況に照らし合わせて検討することも必要である。以上やサンプリングの手法などを含むいくつかの論点については、*Journal of Development Economics*誌の特集号が本書を補完するうえで参考になるものと思われる[JDE 2012]。

第2は、学術的成果との関連性、すなわちフィールド調査からアウトプットへの橋渡しに関する記述が少ないことである。本書のエピローグは、プロジェクトで得られた知見を整理しており、補論にはプロジェクトのマイクロデータを用いた論文のリストと要約が記載されている。しかし、これらは機械的な羅列という印象を受ける。本書の性格上、成果の詳細に立ち入ることは求められていないが、プロジェクトのどのような特徴がいかにして学術的成果に結びついたかを明示的に論じたほうが有益だったと思われる。将来を完全に見通すことができない状況で、長期におよぶデータの存在が予期しない金融危機や政策の影響を評価するうえで役立つことはいうまでもない。また、家計の複数の側面、すなわち消費や生産の主体であり投資の主体でもある側面を同時に考慮することで、市場が不完全となるメカニズムをデータから特定することも可能となる[Karavivanov and Townsend 2014]。すなわち、家計を多面的にとらえる詳細な情報が、家計を取り巻く市場の機能についても厳密な分析を可能としているのである。

現実の生産活動と同様、データも摩擦のない世界から生み出されるわけではない。費用や時間的な制約もあり、フィールド調査ではしばしばデータの質に関して妥協してしまうこともまったくないとはいえない。しかし、人々の相互理解と信頼を軸とし、ひとつひとつの問題を丁寧に解決していくことがフィールド調査の価値を高めることを、本書によって再認識させられる読者も多いと予想される。実のところ、評者もその1人である。本書を受けて多くの有益なフィールド調査に関する経験が、ますます広く共有されるようになることを期待したい。

文献リスト

- Banerjee, A. and E. Duflo 2011. *Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty*. New York: PublicAffairs.
- JDE 2012. "Symposium on Measurement and Survey Design." *Journal of Development Economics* 98(1).
- Karaivanov A. and R.M. Townsend 2014. "Dynamic Financial Constraints: Distinguishing Mechanism Design from Exogenously Incomplete Regimes." *Econometrica* 82(3).
- Townsend, Robert M. 2011. *Financial Systems in Developing Economies*. New York: Oxford University Press.

(アジア経済研究所開発研究センター)